過去・未来事象の無意図的想起とスマートフォン使用の関連性

○森田泰介

(東京理科大学理学部第二部)

キーワード: 無意図的想起, 過去事象, 未来事象, スマートフォン使用

Relationship between smartphone use and involuntary remembering of past and future events

Taisuke Morita

(Faculty of Science, Division II, Tokyo University of Science)

Key Words: involuntary remembering, past events, future events, smartphone use

目 的

我々の認知は環境とカップリングされたシステムとして働いており (Clark & Chalmers, 1998), スマートフォンを継続的に使用することにより我々の認知活動のあり方が根本的に変化する可能性が考えられる。実際, スマートフォンの使用時間が長い個人は分析的な認知を必要とする課題の得点が高いことが示されている (Barr, Pennycook, Stolz, & Fugelsang, 2015)。また, Marty-Dugas (2017) は, スマートフォンの使用頻度とマインドワンダリング経験との関係を調査し, 両者の間に正の相関が見られることを報告している。

本研究では我々の認知活動のなかでも無意図的想起に焦点を当て, スマートフォンの日常的な使用により過去事象や未来事象の無意図的想起のあり方が異なるのかを検討する。無意図的想起とは, 想起しようとしていないのに記憶がふと頭に浮かぶ現象であり (小谷津・鈴木・大村, 1992), その認知活動が自発的なものであるという点で上述のマインドワンダリングと関連の深いものである。もし無意図的想起とマインドワンダリングがその認知基盤において共通するものを持つ場合には, Marty-Dugas (2017) で明らかにされたスマートフォン使用とマインドワンダリングとの関連と同様のものが無意図的想起との間にも見られることが予想される。

方 法

参加者 インターネット調査サービスに登録している 20 代男性 211 名 (平均年齢 25 歳, $SD = 3$ 歳), 20 代女性 224 名 (平均年齢 26 歳, $SD = 3$ 歳), 計 435 名。

刺激 方向づけ課題用刺激は雨宮 (2011) と同様に“電話”, “友人”, “先生”, “CD”, “電車”, “写真”の 6 項目であった。

手続き 実験はインターネット調査サービスを通じて実施された。無意図的想起を測定するための手続きは, 雨宮他 (e.g., 雨宮, 2009; 雨宮・関口, 2004, 2006; 雨宮他, 2011) が考案したものに倣った。実験手続きは, (a) 方向づけ課題, (b) 想起内容の報告, (c) 想起意図の報告, (d) 各質問への回答から構成されていた。(a) 方向づけ課題では, 6 項目の単語を同時に呈示し, 各単語について言葉の身近さの評定を 5 件法で求めた。単語の呈示順序は参加者毎にランダムであった。(b) 想起内容の報告は, 方向づけ課題中に, これまでに経験した出来事を想起した場合には, その内容を簡単に記述することを求めるものであった。過去事象の無意図的想起に関する報告の後, これからしようと思っている予定の無意図的想起についても同様に報告を求めた。(c) 想起意図の報告は, 方向づけ課題中に, 何かを思い出そうとしたかについて回答することを求めるものであった。(d) 各質問への回答では, 本報告とは無関係な質問紙 2 件への回答と, スマートフォンの使用頻度に関する質問への回答を求めた。スマートフォンの使用頻度に関する質問では, 平均的な平日 1 日あたり, およそ何時間, ある用途・機能のためにスマートフォンを使用するの

かを尋ねた。用途別の質問においては, “仕事や勉強のために”, “娯楽のために”の 2 項目について, 機能別の質問においては“LINE などのコミュニケーションアプリのために”, “Facebook などの SNS のために”, “メールを読んだり書いたりするために”, “通話のために”, “インターネット検索・閲覧のために”, “ゲームのために”の 6 項目について, 使用頻度を尋ねた。

結 果

分析対象 参加者 435 名中, スマートフォンを使用していないと回答した 29 名, 全ての質問に同一の回答をした 78 名, 使用頻度に関する質問に“分からない”と回答した 56 名, 想起意図の質問で“思い出そうとしていた”と回答した 121 名, 想起内容の報告で教示どおりの回答をしなかった 27 名を除外した 188 名 (女性 98 名, 男性 90) を分析対象とした。

無意図的想起の報告 分析対象者 188 名中, 方向づけ課題中に過去事象の無意図的想起を経験したと報告したのは 59 名 (31%), 未来事象の無意図的想起を経験したと報告したのは 55 名 (29%) であった。前者の記述例は“学生時代電車通学で満員電車が辛かった”, 後者の記述例は“ツタヤでなんかのアルバムレンタルしたい”である。

スマートフォンの使用頻度と無意図的想起 スマートフォンの用途別使用頻度と無意図的想起報告の有無との関連を検討するため, “仕事や勉強のために”スマートフォンを使用する時間 (以下, 仕事スマホ) と“娯楽のために”スマートフォンを使用する時間 (以下, 娯楽スマホ) を説明変数, 方向づけ課題中に過去事象・未来事象の無意図的想起がなされたかどうかを目的変数として, ロジスティック回帰分析を行った (表 1 参照)。その結果, 過去事象の無意図的想起の有無を目的変数にした場合, 仕事スマホの係数が有意であったが, 娯楽スマホの係数は有意ではなかった。未来事象の無意図的想起の有無を目的変数にした場合にも同様の結果が得られた。

表 1 ロジスティック回帰分析の結果

説明変数	オッズ比	
	過去事象	未来事象
仕事スマホ	1.63*	1.52*
娯楽スマホ		
尤度比 χ^2	10.16*	7.43*

注) †: $p < .10$, *: $p < .05$

考 察

スマートフォンの使用頻度のうち, 仕事・勉強に関係して使用した場合の使用頻度のみが無意図的想起のあり方と関連することが示された。仕事・勉強といった重要な情報の処理を外的情報装置に担わせることにより, 個人の記憶・思考・注意といった認知活動のあり方がどのように変容するのかについてさらに検討を進めていく必要がある。